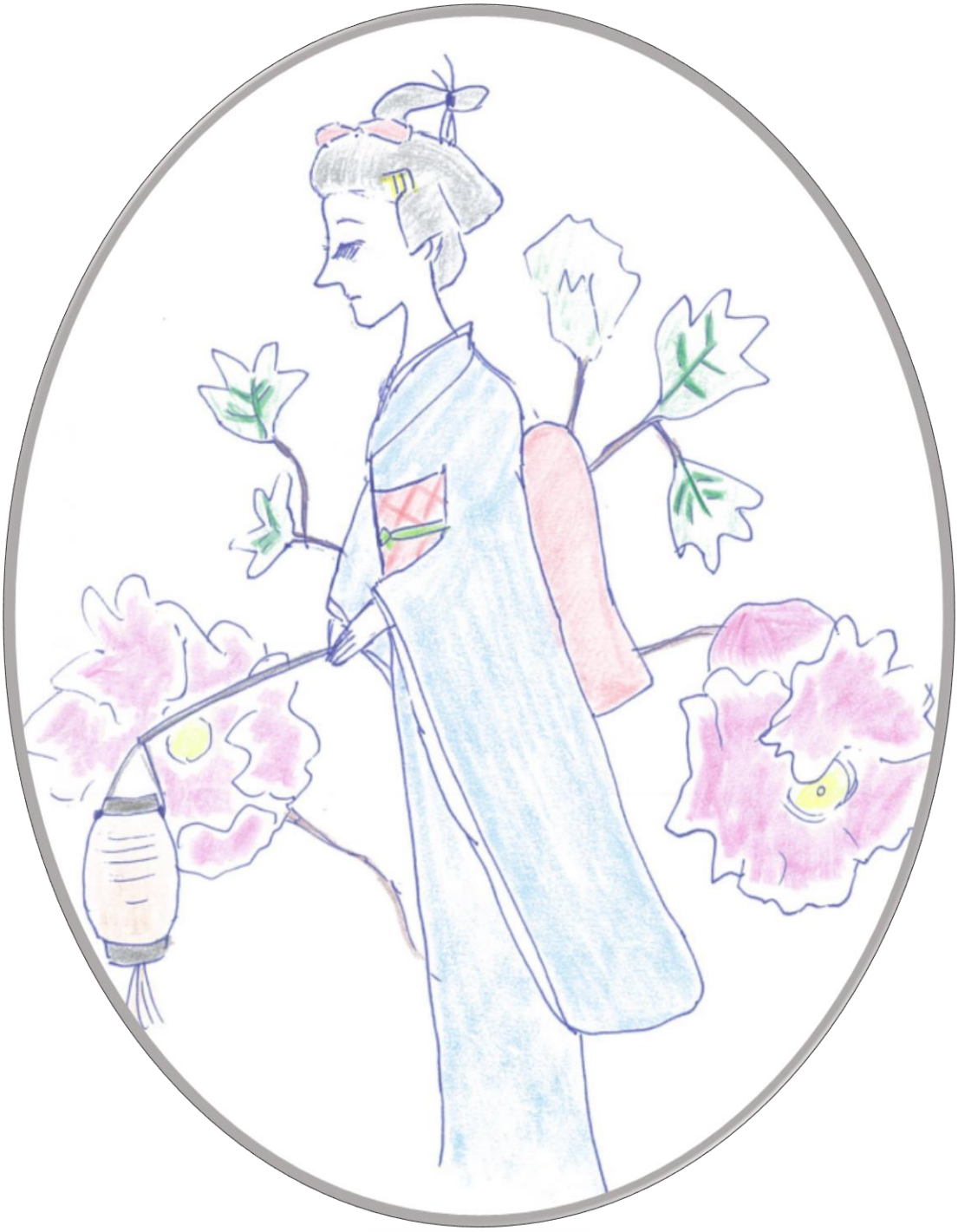
ぼたんどうろう

牡丹灯籠

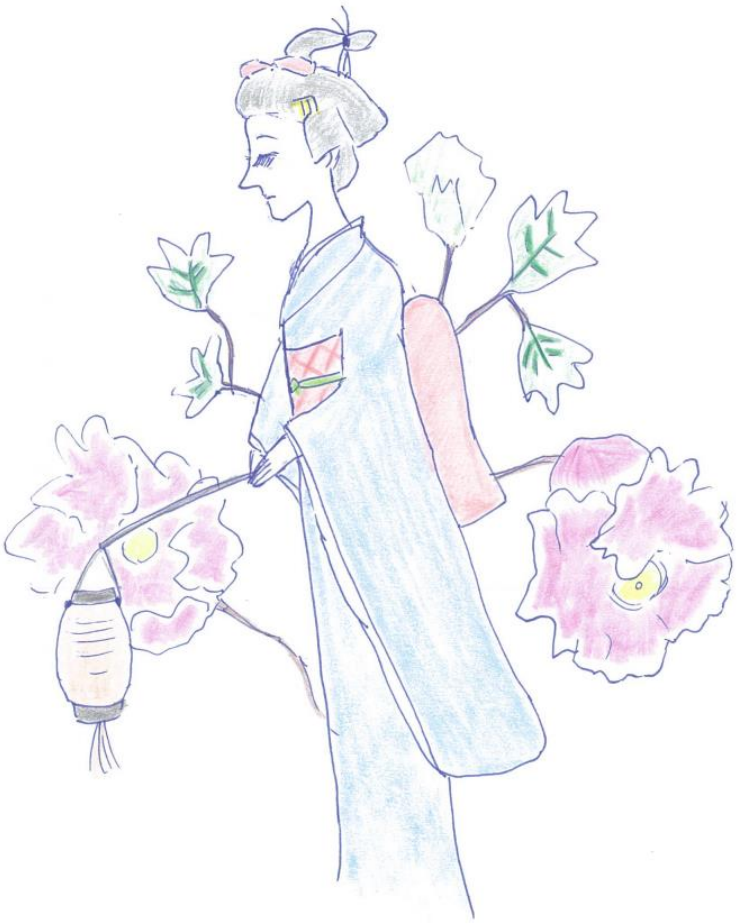


牡丹灯籠

昔 むかし、江戸時代のこわいお 話 です。

萩原新三郎は、顔の良い 侍 でした。たくさんの 女 の人が、新三郎に恋をしました。

その中に、お露という 娘 がいました。お露は、死ぬほど新三郎が好きでした。毎日、毎晩、新三郎のことばかり 考 えていました。他のことができなくなっていきました。だんだん、ごはんを 食べられなくなっていきました。そして、最後には、死んでしまいました。



ある晩、新三郎は、月がきれいなので、見ていました。すると、 女 の人が、新三郎の家の前まで、やって来ました。若くて、きれいな 女 の人でした。新三郎は、その 女 の人に恋をしました。

「おじょうさん、あなたの名前は何ですか。」

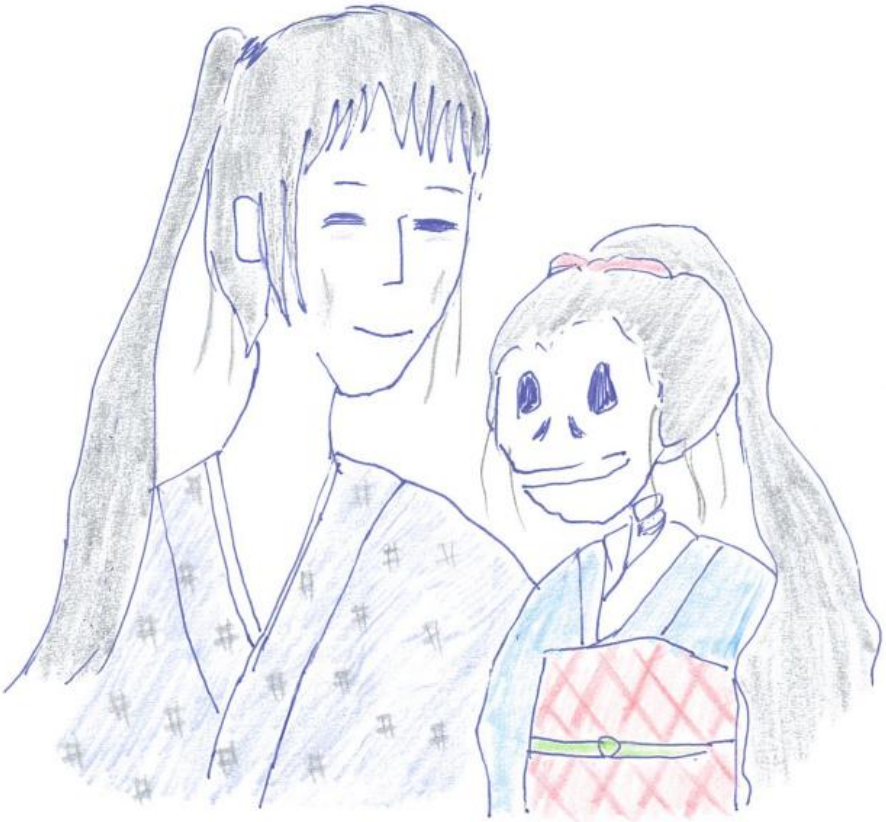
「『お露』と申します。」

「ああ、いい名前ですね。」

その晩から、新三郎と『お露』は、恋人になりました。

恋をしている若者は、幸せです。しかし、新三郎は、幸せではありませんでした。新三郎は、どんどんやせていきました。顔の色も悪くなりました。おじいさんのようになってきました。

新三郎の家で、伴蔵という男が働いていました。伴蔵は、「どうして新三郎さんは、どんどんやせてきたのだろう。ぜんぜん元気がない。病気なんだろうか。」と不思議に思っていました。そこで、ある晩、新三郎が、恋人の『お露』と会っているところを、のぞいてみました。すると。。。



新三郎の横にいた『お露』は、人間ではありませんでした。骸骨でした。そうです、『お露』はもう死んでいました。だから、新三郎に会いに来ていたのは、『お露』のお化けだったのです。死んでも新三郎が好きだったので、『お露』は、お化けになって、新三郎に会いに来たのです。

次の日、伴蔵は、前の晩見たことを、全部新三郎に言いました。新三郎は、驚きました。そして、怖くなりました。

「このままでは、私は、すぐに死んでしまう。『お露』のお化けが、私を殺すだろう！」

新三郎は、どうしていいかわからなかったので良石というお坊さんに相談しました。良石は、特別な紙をたくさんくれました。そして、こう言いました。「この紙には、こわいお化けから人間を守る力があります。この紙を家の周りに、いっぱい貼りなさい。そうすれば、『お露』のお化けは、あなたの家の中に入ることができません。」

新三郎は、良石にもらったたくさんの紙を、家の周りに貼りました。すると、その晩から、『お露』のお化けは、新三郎の家の中に入ることができなくなりました。

しかし、『お露』のお化けは、どうしても新三郎に会いたいと思いました。そこで、ある晩、仕事が終わって、新三郎の家を出てきた伴蔵の前に現れて、話しかけました。

「ひぇぇぇぇぇ～。お化けだ！」伴蔵は、怖くて大きな声をだしました。

「だいじょうぶ、あなたには何もしません。私は、新三郎さんの家に入りたいのです。でも、あの紙があると、入ることができません。お願いです、あの紙を取ってください。」と『お露』のお化けは言いました。

「いやだ。あなたが、新三郎さんに会ったら、新三郎さんは、死んでしまう。」と伴蔵は答えました。

すると、『お露』のお化けは、こう言いました。

「あなたがあの紙を取ってくれるのなら、たくさんお金をあげましょう。」

伴蔵は、子どもの時から、お金がありませんでした。がんばって働きましたが、まだお金がありませんでした。「もう、お金がない生活は嫌だ。」といつも思っていました。だから、伴蔵は、そのお金がほしいと思いました。　そして、『お露』に、「あの紙を全部とってあげよう。」、と約束しました。

次の日、伴蔵は、新三郎の家の周りに貼ってある紙を、全部取りました。その日の夜から、また『お露』のお化けが、新三郎に会いに来ました。

新三郎は、『お露』のお化けに毎晩会ううちに、どんどんやせていき、ついに死んでしまいました。

伴蔵は、しばらくは幸せでした。『お露』のお化けにもらったお金があったからです。

ある晩、伴蔵は、お酒を飲んで、川の横の道を歩いていました。すると、川の中から、ぬる～っと何かが出て来ました。それは、女の人の白い手でした。その手は、伴蔵の足をつかみました。そして、ものすごい力で、伴蔵の足をひっぱりました。

「わ～～～～～、な、なんだ！助けてくれぇ～～～～～～！」

伴蔵は、大声で叫びました。でも、誰も助けに来てくれませんでした。そして、伴蔵の体は、川の中にひっぱられて行きました。その晩から、伴蔵を見た人はいませんでした。（1011語、1285語のテキストカバー率88.5%）

書いた人／執筆者：田畑サンドーム光恵

てつだってくれた人／執筆協力者：森下幸子先生